

二〇一三年六月十四日 開催

「街角でふれるコトバと社会」シリーズ 第2回——東南アジア言語グループ

ロジャット Rojak から読み解くマレーシア

井口由布

■講演者……井口由布(立命館アジア太平洋大学准教授)
■司会……林 史樹(本学アジア言語学科教授)

はじめに

本報告は、マレーシア風のサラダRojak(ロジャット)という言葉を手がかりにして、マレーシアにおける多民族社会とそこの多言語状況について読み解いたものである。

はじめにマレーシアについて概観しておこう。マレーシアは、主にマレー半島を中心とした西マレーシアとボルネオ島の北部の東マレーシアからなる。人口は約二七〇〇万人であり、民族構成としてはマレー系、中国系、インド系などからなる多民族社会である。このうちマレー系が五割強、中国系が三割弱、インド系が一割弱であるといわれている。マレー系はイスラム教を信仰し、日常的にマレー語を話す人々であ

る。マレー半島の先住民族であると言われているが、現在のインドネシア各地からマレー半島やボルネオ島へやってきた人々の子孫も多い。中国系やインド系の多くは、十九世紀後半から開始するイギリスによる植民地統治のなかで、植民地経済の必要から導入された移民の子孫である。

民族と同様、今回の報告のテーマである言語にかんしてもマレーシアは多様な状況にあり、一般的には多言語社会であると理解されている。マレーシアでは、国語であるマレーシア語(マレー語)のほかに、英語、中国語(北京語、広東語、福建語など)、タミル語、そのほか先住民の諸言語が話されている。マレーシアでは民族語による教育も行われており、中国語、タミル語を教育言語とした学校がある。

以上のように、マレーシアは多民族、多文化、多言語という言葉によって理解されることが多い。マレーシアにおける多文化状況は、言語や文化を同一にした民族集団が複数並列



講演する井口先生と、遠藤先生

的に存在しており、民族集団と民族集団の境界線がはっきりしているものとしてイメージされる。このような多文化の理解をマレーシアの公式なイメージであるにとらえても良いだろう。しかしながら今回の報告では、マレーシアの多文化状況がそのような複数並列的なものではなく、むしろ境界線が溶解したような雑種的な状況であることを示したい。それは公式なイメージではとらえきれないような状況である。マ

レーシアにおける公式のイメージが「多文化」「多民族」「多言語」の「多」で表されるとしたら、「多」を超えてしまっている雑種的な状況をここでは「ロジャット」という言葉で表していきたい。

以下では、マレーシアにおける言語をめぐる状況を概観した後、Bahasa Rojak (ロジャット語) について説明し、ロジャットな状況について例をあげながら見ていくことにする。

マレーシアにおける言語をめぐる状況

ここでは言語をめぐる状況について、マレー語(マレーシア語)、英語、中国系言語を中心に説明する。マレー語は、もともとはスマトラ島とマレー半島の一部で話されていた言語であったという。ヨーロッパによる植民地主義が本格化する以前の時代、東南アジア島嶼部またはマレー諸島地域は、マレー諸島各地、中国、アラブ、インドなどから商人が来訪し盛んに交易が行われていた。マレー語は交易の言語としてマレー諸島地域でさかんに使われ、現在の英語のように国際語(リンガ・フランカ)として流通していた。

植民地時代においてイギリスは、一部のエリート層に英語教育を施した以外はマレー語での初等教育を進めた。植民地時代以前からマレー語がマレー諸島地域全体に拡まっていたこと、植民地時代においてマレー語が教育言語として一定の

地位を占めていたことで、一九五七年の独立時にはマレー語を国語とすることが決定された。一九七〇年代には高等教育もマレー語で行われるようになった。しかしながら、英語の国際的な優位性やそのほかの民族語の併存状況などから、マレー語が国語としてのゆるぎない地位を確立しているとは言いがたい。とりわけ昨今のグローバル化状況では、マレー語だけで仕事をえることが難しくなっている。マレー系の人々にとってマレー語は母語であるが、エリート層の多くは英語が流暢である。また、世界経済の中で中国の地位の向上から、都市中間層のマレー系の中には子供を中国語学校へ通わせるものもでてきているという。

次にマレーシアにおける英語の状況についてみてみよう。イギリスの植民地であったこともあり、現在においてもマレーシアでは英語を理解する人口が比較的多いといえる。しかしながら、植民地時代のイギリスは分割統治を行っており、英語教育を受けたのはエリート層に限られていた。また、独立後の国語化の政策の中で初等教育での教育言語は国語であるマレー語か、北京語やタミル語などの民族語となった。一九七〇年代には高等教育における教育言語もマレー語となった。その意味では、マレーシアにおいて英語は公教育における教育言語になってはいない。しかしながら新聞やテレビ番組など地元の英語メディアも数多く一般的である。さらに、

昨今のグローバル化状況で英語教育を強化しようという動きがみられている。

最後に中国系の言語についてみてみよう。中国系の人々がマレーシア地域へ来訪したのは、十七世紀半ばの交易の時代以来である。そのころの移民たちは、マラッカやペナンなどで現地妻をめぐって現地化した。十九世紀半ば以降は、イギリスの植民地支配が本格化し、錫鉱山で働く労働者として中国から多くの移民がマレー半島へやってきた。

中国系の住民は、出身地域や来た時代などにより異なる言語を話す。初期に現地化した中国系移民は、プラナカン・チャイニーズなどと呼ばれ、中国語ではなくマレー語を話し、生活文化も中国とマレーがミックスしたような独自のスタイルを生み出している。十九世紀以降の移民たちの子孫たちは、首都クアラルンプール周辺は広東語、ペナン、マラッカ、シンガポールなどの旧海峽植民地では福建語を母語とする人々が多い。

十九世紀末までは、出身地域の言語による伝統的な教育などをしていたが、二〇世紀はじめに本国において近代国家が誕生し、北京語による近代教育が進むと、マレーシア地域においても北京語教育が開始した。先にも述べた通り、独立後においても初等教育を中心に北京語による教育は進展した。そのため、マレーシアにおいても北京語は中国系の多くに



井口先生

とつては母語ではなく、あくまでも教育言語である。以上のように、マレーシアでは同一の民族と考えられているマレー系や中国系であっても、その内部は言語的には決して一様ではない。さらに、以下に示すように、マレーシアでは多数の言語が併存している「多」の状況だけではなく、一つの言語にほかの言語が混じっていくような雑種の状況が生まれている。それは日本語に外来語として英語が借用され

ているのとは異なる状況である。以下ではそのような状況を「ロジャツ」という言葉を頼りにしながらみていくものとす

マレーシアにおけるロジャツな状況

マレーシアではバハッサ・ロジャツ *bahasa rojak* という言い方がある。バハッサは言語や言葉という意味で、ロジャツはマレーシア風のサラダを意味している。マレーシア語では修飾関係は日本語と異なって後ろから行われるので、バハッサ・ロジャツを直訳すればロジャツ語である。これは、マレーシアにおける特殊な言語状況をさす言葉なのである。いったいどういう意味なのだろうか。

ロジャツは、乱切りのキュウリ、もやし、パイナップル、あげた豆腐、油條(中華風の揚げパン)などに辛いソースがかかっている食べ物である。ソースの材料はタマリンド、赤唐辛子、海老ペースト、砂糖、レモンジュースなどである。ロジャツは宮廷料理ではなく、路上のトラックや屋台で饗されるスナックである。

マレーシアでは、マレーシア語ではじまった会話が、英語にかわり、広東語や福建語の単語やフレーズが混じったりするということがよくある。このように、会話の途中で言語がどんどん変わったり、異なる言語の単語だけではなく、異なる

る言語のフレーズが混じったりするような状況をマレーシアではバハッサ・ロジャットと呼んでいる。さまざまな野菜や果物が入ったロジャットのように、さまざまな言語がிரிまっているからである。マレーシアでは多くの人が多言語を操ることができ、会話の相手やそのときの状況にあわせて、使用する言語を変えるということがよくおこる。バハッサ・ロジャットのような状況は、偏西風に乗ってアラブや中国から商人が訪れてさかんに交易を行っていたマラッカ王国の時代から見られたという。

マレー語では「ah」という言葉をよく語尾につける。日本語の「ね」や「よ」のようなニュアンスで使うのだが、この「ah」を英語の OK のあとにつけて、OK ah! というような言い方がある。これもバハッサ・ロジャットの一つの例だろう。この OK ah は、英語で会話しているときにもマレー語で会話しているときにも出てくるのであるから、英語であるともいえるしマレー語であるともいえるし、そのどちらでもないともいえる。

次は、マレーシアの生活におけるロジャットな状況についてみてみよう。第一にあげるのは、ヤスミン・アフマド監督の二〇〇四年の映画『細い目』におけるロジャットな人々である。ヤスミンはその名からもわかるようにマレー系の映画監督だが、さまざまな人が混じり合って生活しているマレーシアの

日常を描いてきた。まさにヤスミンはマレーシアの「ロジャット」な日常を描いてきた監督といえる。残念ながら彼女は二〇〇九年に五一歳の若さで亡くなった。

『細い目』では、中国系の青年とマレー系の少女の恋物語が描かれている。現在のマレーシアでは一般的には民族別の棲み分けが進んでおり、民族の垣根を越えた恋愛や結婚はたしかに一般的ではない。また、映画や小説などのフィクションという観点からみても、異なる民族同士の恋愛や結婚はこれまで多く描かれてこなかったといえる。そういう意味ではヤスミンの映画の主題がロジャットであるということができよう。

さらにこの映画は、言語的にもロジャットである。この映画を字幕なしで理解できる人はマレーシアの中にもあまりたくさんはいないだろう。物語の主人公の一人である中国系の青年の父親は広東系で、母親はプラナカン・チャイニーズである。映画は、マレーシアのロジャットな状況を表す印象的なシーンではじまる。主人公の青年は母親に広東語で話しかけ、母親はマレー語で青年に答える。この青年の家族全員が集まる食卓の場面では広東語が話されているが、母は息子にだけはマレー語で話すのだ。物語のもう一人の主人公であるマレー系の少女は家族とマレー語で話す。だが恋人の青年とはおもに英語で話している。マレー語が彼女の母語で、青年の母は

かれにマレー語で話しかけているのに、恋人同士の言葉は英語なのだ。

最後に私がクアラルンプールで大学院に通っていたときの中国系の友人の例をあげよう。名前を仮にラウさんとしておこう。その友人は当時マラヤ大学の四年生だった。お父さんは客家系で、お母さんは広東系である。かれはお父さんとは中国語（北京語）で、お母さんとは広東語で、父方の祖父とは客家語で話すそうである。この家族が一つのテーブルに座ったときはどのような言語が話されるのかと尋ねると、北京語、広東語、客家語のさまざまな言語がとびかうのだからである。ちなみに彼が名前をアルファベット表記にするさいは、広東語の発音にしたがっていた。

ラウさんは中国語が教授言語である小学校へ通ったそうである。入学の少し前からお父さんが広東語ではなく北京語で話し始めたという。中国語で教える中学もあるのだが、ラウさんは中学校からマレー語で教える学校へ通うことになった。とはいえ、急にはマレー語で勉強を始められないので、一年間のギャップイヤーでマレー語を勉強したという。ところで、マレーシアではマレー語を教授言語とする学校を英語学校と呼んでいる。

ちなみに英語は、小学校から学校で勉強したそうだ。英語の先生は英語で英語を教えていた。ラウさんも英語はペラペ

ラだった。マレーシアの日常生活でラウさんが英語を話すのは、スターバックスなどの海外資本のコーヒーショップで注文するときや、ショッピングセンターのシネマコンプレックスで映画のチケットを買うときなどである。こういうときは仮に相手が中華系であってもマレー系であってもラウさんは英語を使っていたように思う。反対にラウさんがマレー語を話すのは大学の事務所である。国立大学であったこともあり、マラヤ大学のスタッフはほとんどマレー系だった。

マレーシアで最も難関といわれるマラヤ大学に通っていたラウさんだったが、英語の作文は苦手だったようだ。中国語とマレー語の影響なのかラウさんの英語の文章では時制がほとんど無視されていた。

マラヤ大学での授業はほとんどマレー語で、レポートなどもマレー語で作成するのがふつうである。とはいえ、専門的な論文や本はほとんど英語だ。ラウさんは日常的には中国語の新聞を買っていた。その当時は、日本人にとってみたら旧字体のような台湾風のスタイルで書かれている新聞と中国大陸の簡体字というスタイルで書かれている新聞があった。ラウさんはどちらの新聞でも読めるようであったが、どちらかというと台湾風のスタイルに親しんでいたようだ。ラウさんがテレビでみるドラマはだいたい広東語だった。クアラルンプールの中華系の多くが広東語なので、広東語がいちばん得

意だったよう。だが香港の広東語とクアラルンプールの広東語は、いぶんちがうようで、香港のドラマや映画をみて香港流の広東語を話すのが当時はかっこいいと考えられていたようだった。マレーシアでも全世界の中華系向けの無国籍ドラマのようなものがたくさん撮影されており、ラウさんの友達の中にはそのようなドラマの俳優もいた。そのようなドラマの言語はその当時は香港風の広東語だったそうである。

ラウさんのマラヤ大学での一番の友達はペナン出身のジョセフさんだった。中華系だが、日常生活には英語名を使っていた。かれは中国語学校に通っていないので、中国系でも北京語ができない。また、ペナンの中国系の共通語は福建語だったため、二人の会話は英語とマレー語のまぜこぜだった。

私は博士課程のころマレーシアに二年間住んでいた。ラウさんなどの中華系の友達から北京語を教わったり、地元中華系の食堂で広東語をすこし使ったりするうちに、その当時の私はすっかりロジャツな言葉に慣れていった。英語やマレー語や中国語などがまじりあってしまうのだ。今でもマレーシアに行くと、地元の人たちと話すときのようなロジャツな感覚を思い出すものである。

まとめ

はじめにも述べたようにマレーシアの公式なイメージは、

「多文化社会」や「多民族社会」というものである。このときの「多」は、異なる言語や異なる民族を話す集団が並列的に存在し、それぞれの境界線がある程度はつきりしているようなイメージをもっている。たしかにマレーシアにはそのような側面がある。マレー系であればマレー語で話し、マレー系のお店で食事をし、マレー語の新聞を読んでマレー語のドラマを楽しみ、マレー系の友人とつきあう。

民族を超えた深いつきあいは、一般的ではないかもしれない。そうはいいながら、マレーシアの日常は「多」を超えたロジャツな状況にあふれているのである。一人の人がさまざまな言語を話したり来たりし、一人の人のなかにさまざまな言語が入りこんでいる。マレーシアの多くの人がそのようなロジャツな日常を生きているのである。たしかにロジャツな状況は政府の文化政策ではあまり奨励されないかもしれない。しかしながら、さまざまに混ざり合ったロジャツな状況はマレーシアの重要な魅力にもなっているはずだ。ロジャツでも OK lah!

遊びにいく di choi から考えるベトナム社会

遠藤 聡

■ 講演者……遠藤 聡（神田外語大学非常勤講師）

■ 司 会……林 史樹（本学アジア言語学科教授）

ベトナムは長い戦争を経験し、また今日においても社会主義国である。しかし、そうした歴史を通じて、あるいはそうした時代のなかにおいても、そこに暮らすベトナムの人々は、明るさや活力を忘れなかった。そうしたかれらの気持ちが現在の経済成長を実現しているベトナム社会の深層にあるのかもしれない。本稿では、歴史・社会状況を踏まえたくうえで、挨拶にもなっている「di choi」（遊びにいく）というコトバのやりとりからベトナムの人々の関係をみていく。

ベトナムの近現代史

ベトナムは、近現代史において長い植民地支配および戦争を経験しなければならなかった。一八八七年にフランス領インドシナ連邦が成立し、ベトナムは、カンボジアとラオス（一

八九九年編入）とともにフランスの支配下に置かれた。一九四〇年には日本軍の支配（仏印進駐）がはじまり、ベトナムは、フランスと日本による共同支配に苦しんだ。日本敗戦後の一九四五年九月、ベトナム民主共和国の独立宣言がなされたが、この宣言は国際社会からは認知されず、フランスは再植民地化をはかった。こうして、一九四六年十二月、ベトナム民主共和国とフランスとの間でインドシナ戦争が勃発した。この長い戦争のなか、アジアに冷戦構造が覆った。一方でフランスは一九四九年七月、親仏のベトナム国を樹立していた。そして一九五四年七月、ジュネーブ協定によって、ベトナムは北緯十七度線を境に、北にベトナム民主共和国、南にベトナム国が配されることとなった。

フランスの撤退後にベトナムに現れたのがアメリカだった。共産主義が近隣諸国を踏破するというドミノ理論により、自由主義の南ベトナムを存続させるべく、一九五五年十月、反共親米のベトナム共和国を樹立させる。こうして社会主義の



講演する遠藤先生

激しい戦争となったベトナムでは、パリ協定により米軍が一九七三年に撤退するものの、同一民族同士の戦いは続いた。一九七五年四月、事実上、北ベトナム軍が南ベトナムを敗北させるかたちでベトナム戦争は終わり、一九七六年七月、ベトナムはベトナム社会主義共和国として統一した。しかし、長い支配や戦争から解放された時間は短かった。南部では急激な社会主義的改造が行われ、資産家・地主層・エリート層への弾圧や、再教育収容所での「思想改造」も行われた。こ

北ベトナム、自由主義の南ベトナムという分断国家ができた。国家統一を目指す北ベトナムは、一九六〇年十二月、南部に南ベトナム解放民族戦線を結成し、南ベトナムベトナム戦争が始まった。アメリカは、一九六五年三月から軍事介入をし、北部には北爆を南部には地上軍を展開した。こうして

うしてポートピープルと呼ばれる大量の難民が流出した。これらにとつて、「祖国」はそこには築かれなかったのである。さらに、一九七八年十二月、ベトナムがカンボジアに軍事侵攻をし、親ベトナムのカンボジア人民共和国を樹立させるとともに、ベトナム軍をカンボジア領内に駐留しつづけた。カンボジア問題は、ポル・ポト政権下での大虐殺、中越戦争（一九七九年二月）などの問題を抱えつつ、その解決は冷戦の終結を待たなければならなかった。カンボジア和平協定が締結されるのは、一九九一年十月であった。

ベトナムの政治体制・経済体制

難民問題やカンボジア問題などで国際社会から孤立したベトナムは、ソ連・東欧圏からの経済援助に依存する社会主義経済体制を形成せざるを得なかった。国営企業や農村での合作社にみられる集団化や、バオカップ (bao cấp) と呼ばれた国家補助金制度は、人々の勤労意欲を奪っていった。米などの食料品や生活必需品は、配給切符による配給制度で支給される状況を生んだ。こうしたなか、ソ連圏の経済状況が悪化し、ベトナムに対する経済援助が激減した。ベトナムは、新たな道を模索しなければならなかった。

一九八六年十二月、ベトナム共産党第六回大会でドイモイ (đổi mới) が採択され、市場経済の導入と対外開放政策が

推進されることとなった。ところで、このドイモイとは、冷戦という時代のなか、ソ連圏が存続していくことを前提として策定されたものである。そのため、共産党一党支配の下、市場経済化による生産性の向上と全方位外交を進めたのち、将来的には社会主義経済に復帰するという「社会主義市場経済」という名称が必要であった。ところが、冷戦の終焉そしてソ連解体という国際社会の衝撃がベトナム政治を襲った。

一九八九年十一月のベルリンの壁崩壊、同年十二月の米ソ冷戦終結宣言、その後のソ連・東欧圏における民主化の波を経て一九九一年十二月、ソ連が解体した。市場経済化を進めていたベトナムには共産党一党制を堅持していく説明が必要となった。そこで登場したのが、ホー・チ・ミン思想である。共産党の創設者であり、建国の父であり、また「ホーおじさん」と親しまれてきたホー・チ・ミンのシンボル性が必要であったからである。一九六九年に死去していた彼の「共産主義者の顔」ではなく、「民族主義者の顔」が喧伝された。そしてこの頃、ベトナム社会における伝統や文化の復興が叫ばれるようになった。

経済面においては、ベトナムは順調な経済成長を遂げるとともに国際経済に参入していった。一九九五年に ASEAN（東南アジア諸国連合）、一九九八年に APEC（アジア太平洋経済協力会議）、二〇〇七年には WTO（世界貿易機関）へ

の加盟を果たした。ハノイやホーチミン市では、近代的な高層ビルが立ち並び、道路に溢れるオートバイの洪水、最近では豊かさの象徴でもある自動車の行き交いも多くみられるようになった。一方で、山間部・農村部・離島などでは開発の波から取り残され、経済的格差が広がっている。「工業化・現代化」のスローガンとともに、「公平・民主な社会」の実現が叫ばれた。

コトバの時代性

ベトナムでは、挨拶としてのコトバはあまり使われない。たとえば「シン・チャオ」(xin chào) は、「おはよう」、「こんにちは」、「こんばんは」のほか、「さようなら」の意味さえももつが、ベトナム人の間では頻繁には使われないようである。またお礼や謝罪のコトバもあまり使われない。「ありがとう」(cảm ơn)、「すみません」(xin lỗi) などである。とはいっても、ベトナムの人々は会話が大好きである。延々と話が続きこともある。ベトナムの人々は、かれらの会話の時と場を楽しんでいるとも思われる。挨拶はさりげなく、おしゃべりを楽しんでいられるかもしれない。

一方で、ベトナムでは、次に掲げる人称代名詞に象徴されるように、人と人の関係が大事にされる。ベトナムに行くと、年齢や職業など、さらには結婚をしているかなどを頻繁に聞

かれる。これは、自分と相手との社会的な関係を見極める必要があるからである。年齢、性別、身分、親しさの度合い、尊敬の度合いなどが、「私とあなた」の人称代名詞の使い方につながる。日本と同じように、「先生」(*thầy*)、「おじさん」(*ông*)、「おばさん」(*bà*)、「お父さん」(*cha*)、「お母さん」(*mẹ*)、「お兄さん」(*anh*)、「お姉さん」(*chị*)など、他称にも使われるし、自称にも使われる。年下に使われる「子供」(*em*)は、年上の者に対する自称としても、また恋人の女性相手にも使われる。一般的な一人称代名詞としては、「私」(*tôi*)を使った方が無難であろう。

こうしたベトナム社会におけるコトバの時代性をみてみよう。革命や戦争の時代にあつては、「独立」(*độc lập*)、「自由」(*tự do*)、「革命」(*cách mạng*)、「勝利」(*thắng lợi*)、「団結」(*đoàn kết*)、「統一」(*thống nhất*)、「平和」(*hòa bình*)、救国(*cứu quốc*)などのコトバが当然のことながらスローガンとして使われた。そこには、これらのコトバを信じていた人のほか、言わされていた人もいたであろう。これらのコトバは、ホテルなどの名称にも使われた。ベトナムはいまでも「スローガン」の国であり、前述のコトバは、ここに残っている。これは、立て看板を通じてという意味である。人々の賑わいのなか、街角に立っている看板は、この国が社会主義国であることを思い出させてもくれる。

ドイモイ後、豊かな社会へ歩みだした一九九〇年代前半では、「貧しい」(*nghèo*)というコトバがまだ頻繁に使われていた。外国人観光客相手の場合が多いが、「私たちベトナム人は貧しいですから」とよく言われた記憶がある。またほかのアジアの国と同様に、日本のTVドラマの「おしん」(*Osin*)が人気を得ていた。日本の経済成長に自分たちの夢を重ねていたであろう。順調な経済成長が進んだ二〇〇〇年代に入ると「おしんビジネス」なるものが現れた。家庭内労働者(メイド)として、農村から都市へ、また海外出稼ぎ労働者の通称に使われた。ちなみに、街中狭しと走り回るオートバイ(*xe máy*)は「ホンダ」(*Honda*)と呼ばれている。

また、時代とは関係なく使われているコトバとして、当然のことではあるが、「いくらですか?」(*Bao nhiêu tiền?*)や「いくらいたしまして・問題ありません」(*không có gì*)がある。ベトナムの街を歩いていると、「数字」のやりとりがよく聞かえてくる。これは主に「金額」としての数字である。「いくらですか?」「まけてよ!」という商いの場のやりとり以外でも、「いくらで買ったの?」「何々はいくらするの?」という会話のなかで「数字」が行き交うのである。「どういたしまして」は「ありがとう」の返事として使われるが、「問題ありません」は英語の「no problem」と同様な使われ方もされる。ベトナムで道を尋ねると、親切にも同行して案内してくれる

ことがある。こちらが「ありがとうございます」というと「どういたしまして」と答えが返って。全く違った場所に案内されたときには、「ノープロブレム」の意味でこのコトバが使われることになる。

di choi (遊びに行く)とベトナム社会

ベトナムでは、挨拶としても使われる di choi というコト



街を走る「ホンダ」

バがある。di は動詞で「行く」という意味であり、choi は主に動詞として「遊ぶ」や「楽しむ」の意として使われるが、動詞に後置される使われ方もある。すなわち di choi で「遊びに行く」、「ちょっとおでかけ」、「散歩する」の意として使われる。書き言葉では、主語、目的地、相手などを置いて成り立つが、話し言葉では、di choi が単独で使われる場合がほとんどである。二十年近く前、筆者がベトナムのハノイで資料調査をしていたとき、留学や調査に来ている日本人の下宿先や寮に電話をかけてみると、とりつがれるコトバは di choi である場合が多かった。実際には、遊びに行っているのではなく、大学でベトナム語やベトナムの歴史を勉強したり、公文書館で資料を収集したり、社会調査をしている場合が多かった。

「行く」(di) は、普通の使われ方としては、学校に行く、仕事に行く、入信する、旅行に行く、外国に行く、受験する、出家する、寝る、入浴する、便秘をする、死ぬ、結婚する、再婚する、商いをする、買い物に行く、外国に行く、芝刈りに行く、破産する、小便をする、大便をする、漁に出る、死ぬなど、具体性をもつ語を後置し、意味自体にも具体性を有する。「遊ぶ」(choi) は、「遊ぶ」、「楽しむ」のほか、ほかの語を後置して、スポーツをする、テニスをする、サッカーをする、楽器を弾く、将棋を指す、カルタをする、トラランプを

する、道楽をする、役を演じるなどで使われる。英語でいえば、di は「go」、choi は「play」である。この二つの語をつづけて di choi とすると、行き先や相手という具体性を有しない使われ方がされるのである。「遊びに行く」(di choi) は、「あいまいなき先」を許容し、「あいまいな相手」をも許容する。特別の目的なしにぶらぶらとするという散歩の感覚に近い普通の娯楽や、今日では、特別な目的なしにバイクを流すといった「夜の娯楽」にも使われる。ハノイやホーチミン市などの都市では、夜になると多くの人々がオートバイで街中を走り回る。一人乗りで、友達や恋人との二人乗りで、家族で楽しむ三人乗りから五人乗りで。近年ではヘルメット着用が義務付けられたが、かれらの顔はみな楽しそうである。街を歩いてみると、呼びかけのコトバである「やあ」(oi) が飛び交う。英語では「Hey」の感覚に近い。返すコトバは、ニコッと笑って di choi である。

ベトナムでは、戦争や社会主義経済の失敗など、苦しく貧しい時代を送らなければならなかった。そうした時代にあっても、人々は「笑顔」の代わりにこのコトバを使ってきたのかも知れない。たとえ、遊びに行くわけでもないのに、遊びに行くところがないのに、一緒に出かける相手がいないのに、どんなときでも、明るく、活力をもって暮らす人々の間で「挨拶」として使われたのではないだろうか。戦争や配給制度

(Đạo cảp) 時代を知らない世代が半数を占め、またドイモイが開始され二七年を過ぎ、豊かさが実感できる人々が増えていく今日において、「di choi」というコトバのやりとりにより、人々の明るさを感じる。

参考文献

- 今井昭夫・岩井美佐紀編著『現代ベトナムを知るための60章』(第二版) 明石書店、二〇一二年。
小高泰監修『ベトナム検定』めこん、二〇一〇年。



家族で楽しむ



友達と楽しむ